

## ★シンポジウム

### ○シンポジスト

和歌山県教育庁教育局教育支援課 専門員  
指導主事

京都市立洛風中学校 校長  
海南市立大東小学校

馬場 敦義  
松本 穂  
芦田 美香  
小田川 知晶

### ○ファシリテーター

日本生徒指導学会副会長 日本生徒指導学会関西地区研究会会長 新井 肇

## ◇シンポジウムの概要

立場の異なる4名のシンポジストが、「児童生徒理解に基づく安全・安心な魅力ある学校づくり」に関する各項目について、市町村教育委員会の取組、学校の取組による話題提供を行う。

## ◇発表要旨

和歌山県教育庁教育局教育支援課 専門員 馬場 敦義  
指導主事 松本 穂

### 「安全安心な魅力ある学級作りの研究事業について」

和歌山県教育庁では、いじめ・不登校について、教育相談体制の充実を図るとともに、気になる児童生徒を早期に見いだし、適切な支援に繋げるよう対応マニュアルの作成とともに、スクールカウンセラーや支援員の配置のもと積極的な取組を推進している。

令和2年度より、小学校教員を研究員として、安全安心な魅力ある学校作りの研究事業を実施してきた。県の地形上、南北に地区を分け、それぞれが年度ごとに「いじめを生みにくい学級作り」「発達支持的生徒指導を取り入れた学級作り」「安全安心な居場所となる学級作り」とテーマを変えながら研修を重ねる中で、研究員が自らの得手不得手を理解するとともに、子どもとの共感的な人間関係の育成による教師の深い児童理解が「いじめ・不登校を生みにくく、安全安心な魅力ある学級作り」に繋がることを学ぶなど、教育実践の在り方や他の教員との協働性への意識が向上するなどの効果が見られた。今後は、時系列として縦断的な視点（成育歴など）も加えた児童生徒理解を進められる視点を持てるよう努めたい。意欲的に取り組む教員が、さらに活躍できるよう引き続き支援をしていきたい。



海南市立大東小学校 教諭 小田川 知晶

### 「安全安心な魅力ある学級作りの実践について」

小学1年生の学級担任を受け持つ中で、一人一人はいい子だが、人を責めたり、意見を受け入れられなかったり、特定の子としか協力できなかったりするなどの状況があり、学級全体を繋げる仕掛けや仕組み作りに苦慮していた。県の研究事業の研究員となり、子どもたちの問題解決のためのスキルや態度等を獲得するための取組として「クラス会議」の実践研究を重ねてきた。話し合いの経験が少ない1年生に対し、ゲームを取り入れるなど、前向きな雰囲気作りから始めた。テーマを



決め、好き勝手に発言するのではなく、目印を持っている人を発言者とするなど、ルール作りに工夫をした。次第にクラス会議への興味関心が深まり、「誰かの困り事の解決策を考えることが楽しい」という感覚が養われ、コミュニケーションの基本である「相手の話を最後まで聞く」「相槌を打つ」「相手に意識を向ける」スキルを獲得することができた。この取組を行ってきた子どもたちが5年生になると、「自分と違う意見に対して、その相手の考えを尊重しつつも『私はこう思う』と伝えることが大切である」ということを理解するまでに至った。

今後においても、人に頼ったり頼られたり、力を合わせたり、認め合ったり、一緒に喜んだり悲しんだりする共有体験を通して互いの関係性を深めていける学級経営をしていきたい。小学校低学年から仲間と協力して問題解決してきた経験や、人間関係を築く力は、中学生や高校生、社会人になっても必ず生かされると信じている。

## 京都市立洛風中学校 校長 芦田 美香

### 「安全安心な魅力ある学級作りの研究事業について」

平成16年に開校した、学びの多様化学校である洛風中学校は、今年度は45名の不登校を経験した生徒たちが通っている。

学級構成は、「Wing（ウイング）」と呼ぶ学年をまたいだ縦割りとしている。一日の流れとして、午前中の授業はゆとりを持って2時間としている。昼休みには学年ごとの活動を行いながら、朝と夕方は異学年の交流を大事にしている。生徒と教員が交流しやすくなるよう「メープル」と呼ばれる学校のリビングルームを設けている。授業は学年ごとの実施だが、同年齢の集団は競争心や優劣が生まれ、不登校を経験した生徒には心の負担が大きい時がある。そんな中「Wing」において異年齢の集団で過ごすことは、頼りやすく弱みも見せやすいこともある。「Wing」で過ごすときの子供たちは「いとこ同士の集まり」のようであり、その中で人と繋がり、受け入れ、自分の良さを発揮できるようになってほしい。

教育課程については、通常の7割程度に抑えた時間数としているが、登校状況が安定しない生徒がいる中、学びの保障のために工夫しながら進めている。また、勤務する教職員については、他校より多い定員配置に加え、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの配置もあるが余裕はなく、すべての教職員が生徒のために日々奮闘している。学校教育目標を見直す際に、生徒も教職員も覚えられるキーワードを検討する中で、生徒の実態を踏まえて「友達」ではなく「仲間」という言葉を使い作成した。

課題としては、教職員が生徒をよく理解している一方で、生徒が困るであろうことを先回りしてサポートしてしまうことがよく見受けられることである。教職員には、生徒の自立を促すためにも「生徒が行動を起こすまで待つ」「手を出さず見守る」ことも意識してほしいと伝えている。また、職員室が生徒に開かれていることもあり、先生同士が密に関わっている姿を生徒たちが分かるような、「楽しんで働く背中を見せる職員室」になるよう努めてほしいことも話している。

日頃の活動や行事について、生徒が集団での関わりを持つよう工夫しているが、一人一人のペースや一人になりたい気持ちも生徒同士で尊重しあっている。また、トラブルが発生することもあるが、学校に通っているからこそその経験であり、乗り越えていくことが大切だと生徒に伝えている。卒業生が進学し、現在の登校状況の報告をくれることもあり、「子どもの底力」を感じる。赴任して2年目だが、今後も社会や不登校生を取り巻く環境の変化に応じつつ、生徒の声に耳を傾けながら学校づくりに努めたい。



## ●質疑応答

### ◆学びの多様化学校について

- ・設置する場合は、中学校を設置するイメージを持っている。他自治体や本県の実況等を把握しつつ分析し、設置検討を進めたい。
- ・洛風中学校では、最初から通常の約7割に抑えた時間数で授業を組み、学習内容を厳選しているうえで、登校状況が不安定な生徒たちに対し、どのようにカリキュラムを修めさせるかであったり、実技教科における作品づくりを完成まで持っていくかなどに苦慮する中、各教科において工夫して進めている。卒業時に学校がめざす子どもたちの姿にどう近づけていくかが大きな課題である。

### ◆教員が主語の「させる生徒指導」から、子どもが主語の成長・発達を「支える生徒指導」への転換をめざす中で、心がけるべきことについて

- ・その子どもについて時系列も含め、多角的に捉えること、また関わりを多く持つことによって些細な変化に気づき、その変化をどう理解するかということ。
- ・子どものしんどさに共感し、その改善や克服に向け共に考えるような「寄り添う姿勢」。
- ・子どもの行動には意味や理由がある。特に低学年は、気持ちの言語化が難しいこともあるため、「良くなりたい」という気持ちに寄り添いながら言葉を引き出すような問いかけが必要だと感じている。
- ・不登校の要因について、教員の捉えと、実際の子どもの思いに齟齬がある場合がある。また、子ども同士が繋がることを大事にしつつ、教員が前に出過ぎることなくファシリテーター的な役割を意識することが最近では重要だと捉えている。
- ・専門家につなぐことも必要だが、教員も「教育の専門家」として学校を「安全安心な子どもの居場所」とすべく矜持を持って児童生徒理解に努め続けるべき。

## ●記録者雑感

基調講演では、生徒指導提要の改訂から3年が経とうとしている今般において、その考え方や実践に向けた姿勢を、多角的に分かりやすくご教示いただけたと感じている。また、自治体における教員を支える体制づくり、また子どもたちへの思いが感じられる取組の実践報告、学びの多様化学校での生徒の実態を的確に捉えたうえでの組織づくりの取組など、それぞれの話題提供から、「児童生徒理解に基づく生徒指導」への【熱意】を伺うことができた。